

## 北村透谷における「親の愛」

李 涼 煥

### 一、はじめに

相思相愛の青春男女が恋愛し、それが実を結んで、二人が同棲の生活に入る。このような恋愛から結婚という展開あるいは変化を一般的にどう受け止めるのであろうか。結婚後の透谷の心境は、明治二十六年八月下旬（花巻より）の北村ミナ宛書簡によくあらわれている。この書簡は、家長としての無責任をなじったミナの書簡に対する返書である。この書簡に妻に対する不満がかなり激しく述べられている。これによると、二人の生き方は折り合わないもので、いわば「不調子」(INCONSISTENT)のものである。「昨日公家の娘、今ま貧詩人の妻」であるミナにしてみれば、「不調子」とは経済的なものと深く関わり合っている。それに、透谷はおよそ一か月以上も留守にして旅をして歩き回っ

ている。夫を責めている姉さん女房、ミナの怨言は、妻として尋常な言い分・文句ともいうべきものである。一方、透谷の方もミナに不平を漏らす。「夫貧すれば初めて妻の助ありときくものを、われは貧して初めて妻の怨言不足を聞く」とある。これは、ミナとの結婚生活の亀裂から涌き出た「不調子」である。結婚前、透谷とミナの恋愛の時代にはとうてい考えられない程の不幸な出来事である。恋愛と結婚の不一致を説かなければならなかった透谷の内面世界は、そこからもたらされたわけである。

明治二十五年六月一日、結婚後満三年半にして、透谷とミナの間には長女英子が生まれた。透谷は数え年二十五歳で父となる。彼は一人子英子を「おふうちゃん」と呼び、非常に可愛がっている。恋愛から結婚への過

程を、自由から束縛への道とみた透谷は、父という厳肅な事実が新しく添加されることによって、彼のいう「愛縛」はさらに厳しいものとなる。しかし必ずしも「実世界の束縛」が透谷の浪漫精神を衰弱させたとは言いつてもいい。長女英子の誕生が透谷を新しい世界に取り組ませるきっかけになるからである。

英子が誕生して間もなく二作が発表された。「鬼心非鬼心」(明治二十五年十一月)と翻訳物「ツルゲネーフの小品」(明治二十五年十二月)がそれである。この二作はいずれも親子の関係を扱っている。そこには自然に赤子英子への父透谷の愛情が潜んでいる。いわば、大人世界に対応する透谷特有の子供観が内在されている。なお「鬼心非鬼心」には窮迫のために我が子を殺す「親の情」。一方、「ツルゲネーフの小品」には絶体絶命の窮地に晒された子を救うために、救いの手を差し伸べる「親の愛」がそれぞれ描かれている。つまり、二作における「親の情」と「親の愛」は、互いに両極端の様相を見せている。これは「他界に対する観念」(明治二十五年十月)において、「無辺無涯の美妙を支給す」べき「二元性」の世界観を示唆するものである。が、この「親の愛」はそれまでの先行研究者達の研究対象にならなかつたらしい。そこには

「親の愛」をあまり意識していない、伝統的な日本特有の文化が内在されているからであると思う。しかし、透谷の文学世界のなかで「親の愛」はどんな形象を与えられているか、また、どんな役割を果たしているかという問題は彼の文学世界に近づく大切な媒介になると思う。要するに、長女英子誕生をきっかけに生み出された「親の愛」が透谷の世界観にどう働いているかということである。それはまた、透谷が「鬼心非鬼心」と「ツルゲネーフの小品」を執筆した背景は何であるかという問いに通じている。

## 二、「小児」観

子供の世界はどのようなものであるか。まず、聖書の話の借りてみよう。マルコ福音書の(10:13-15)に「子供を祝福する」の章がある。イエスに触れていただくために、人々が子供達を連れてくる。弟子たちはそれを見るとすぐ非難する。子供達の相手をするにはイエスはあまりにも重要な方、忙しすぎる方であると考えたからである。しかし、イエスはこれを見て憤る。弟子たちがどれほど驚いたか想像に難くない。イエスはこう言われる。「子供たちをわたしのところに来させなさい。妨げてはならない。神の国はこのよ

うな者たちのものである。」と言われて、それから「はっきり言っておく。子供のように神の国を受け入れる人でなければ、決してそこに入ることはできない。」と付け加えられる。親たちはただ「触って」もらうだけでもいいと思って子供たちを連れてきたのであるが、イエスのされたことは親の期待をはるかに超えたものである。イエスが子供たちを時間を奪う厄介者と見ておられなかったことは明らかである。

マタイ福音書の(18:1-5)に「天の国でいちばん偉い者」の章がある。弟子たちがイエスに聞く。「いったいだが、天の国でいちばん偉いのでしょうか」と。そこで、イエスは一人の子供を呼び寄せ、彼等の中に立たせて、こう言われる。子供たちは普通なんでも知りたがり、また信じて疑わない。親の言葉を素直に受け入れて他の子供たちの前で親を擁護することさえする。言われることをよく受け入れる。教えやすい子供の気質は、神の王国に入ることを願う人すべてが見做らうに値する。「自分を低くして、この子供のようになる人が、天の国でいちばん偉いのだ。わたしの名のためにこのような一人の子供を受け入れる者は、わたしを受け入れるのである。」と締め括られる。以上にみてわかるように、「子供」の世界が「天の国」のもの

であるという聖書の教えは透谷の「小児」観に矛盾しない。

透谷にとって子供はどのように形象されているか。「厭世詩家と女性」(明治二五年二月)には「小児」・「少年」が「想世界」の主体として語られている。長女英子の誕生の時期から考えるに、この評論は夫人ミナが英子を身籠っている時期に執筆されたものである。近いうちに生れる子供の様子が透谷の目の前にちらつく。その「小児」を自分の文学像を象徴する「想世界」の主体に浮彫にする。「小児」は社会のしがらみに苦しめられず真直に伸び、本来の「想世界」に成長し、「実世界」を知らぬ者である。即ち、世界の不調子を得ない。「小児」は生活の上に「実世界」と接せざるを得ない。だから、両世界は相争い、相睨むという関係を保つ。「世の奥に貫かぬ」「少年」の頃人世の不調子を見初める時に、「初理想」の基だ外れるのを感じさせられる。ついに「実世界」を怪訝し、「厭嫌する情」が起る。これが「厭世思想」を胎生する動機になる。「想世界」と「実世界」はそれぞれ「無邪気の世界」・「理想世界」、「浮世」・「娑婆」とも言い換えられる。

エマソンの「愛」<sup>2</sup>には透谷の両文学像「想世界」と「実世界」、そして「小児」の原拠に当たるべきところがある。

大人になると限らない良心の苛責が、蕾のころの歓喜の思い出をにがにがしいものにし、すべてのいとしい人の名前をかくしてしまう。何事も知性または真理の観点から眺めればきれいなものである。けれども体験として眺めれば、すべては酸い。細かな事実は悲しい、しかし、計画そのものは立派で高貴である。現実の世の中——時と所に制約されたこの痛ましい王国——には心配、悩み、および恐怖が住んでいる。思想には、思想には、永遠の喜悅、歓喜のバラが馨っている。ミュージズの神々はみなそのまわりで歌っているのだ。けれども悲嘆は名とからだだと、昨日今日の局部的な利害に執着する。（入江勇起男訳、以下同様）

「蕾のころ」は「少年」の世界、「幼いころ」とも言われる。そこには歓喜の思い出があり、何事も知性または真理の観点から眺めようとする。他の言葉で言くと、「最も幼いころのいんぎんと親切の表明は自然界の示す最も魅力的な絵となる。それは粗野で質朴な人の中に見られる礼節と優雅さの曙光である」となる。

北村透谷における「親の愛」

この「幼いころ」には体験後の「酸」さはなく、「きれいなもの」だけ感じられる。体験後の時と所に制約された「現実の世の中」が「大人」の世界である。ここには、透谷の言う「実世界」そのものである。そこには、「心配」、「悩み」、および「恐怖」がある。「蕾のころ」は限らない良心の苛責に苦しめられる「大人」の世界によって、徹底的に否定される。しかし、その中で永遠の喜悅、歓喜のバラを馨らせる思想こそ「恋愛」である。ミュージズの神々はその回りで「恋愛」を謳歌する。つまり、「蕾のころ」と「大人」の世界にそれぞれ象徴される「想世界」と「実世界」、そして「恋愛」の問題等は「厭世詩家と女性」のそれと重なる。

「実世界」は強大な勢力である。それ故に、既に「浮世の刺衝に当りたる上は、好しや苦戦搏闘するとしても、遂には弓折れ箭尽くるの悲運を招くに至るこそ理の数なれ」とある。「想世界」指向の「小児」・「少年」が「浮世」にぶつかって敗れるのは当然の結果である。このとき、「想世界の敗将」は気阻み心疲れて、何物をか得て満足を求めようとする。これがかなならぬ「恋愛」である。即ち、「想世界と実世界との争戦より想世界の敗将をして立籠らしむる牙城とな

る」ものが「恋愛」である。言い換えれば、「此恋愛あればこそ、実世界に乗入る欲望を惹起するなれ」とされ、「恋愛」の役割は「想世界」と「実世界」を媒介するところにある。この「恋愛」の役割についての透谷の見解は、エマソンの考え方とそっくりである。

以上のみでわかるように、透谷の言う「想世界」と「実世界」の問題は、かならずしも透谷のオリジナリティではないと思われる。「想」と「実」という言葉の援用についての問題はさておき、その源泉はやはり、吉田精一氏の指摘の通り、エマソンに汲んでいると見られないではない。ただ、「想世界」の敗将をたすけ、満足させる牙城は「恋愛」という点に、透谷のオリジナル思想がある。それに「小児」・「少年」もエマソンの「愛」を原拠にしていると言わざるを得ない。しかし、「厭世詩家と女性」には試練や困難に堪えられない子供を見守る「親の愛」については触れられていない。

### 三、「鬼心非鬼心」

「鬼心非鬼心」は窮迫のために我が子を殺す「狂女」の物語である。これは一人子英子の生まれてからほぼ五か月振りの明治二十五年十一月五日、「白表・女学

雑誌」に発表されたものである。東禅寺境内に住んでいた時の見聞に基く〈実文〉としての小品である。

四人家族の家庭がある。夫婦共に真面目で正直である。二人の間に十五歳の娘と六歳の少児がある。八百屋の担ぎ売りに頼る生活は貧しいながら、その日その日を辛うじて生きている。しかし、妻にはいつの頃からか、何となく気鬱の様子が見え始める。が、夫はもちろんのこと近所の人々もそれに気付かない。しかも、ここ三四年の金融の逼迫のために世の有様は様々の転変を見たが、その日稼ぎの商人に軽からぬ不幸をもたらした。正直をもって商売するものに不正の損失を蒙らせることも多い。この夫婦はまださほどの困難には陥らない。が、妻は気鬱のようすをそれとなく見せ始める。「或日の事」、妻は娘を家に残し、少児を携えて出かける。一家の生活に苦しむ彼女は米を買う錢を算えつつ、ふと次の言葉を漏らす。「もしこの小児なかりせば、日々に二錢を省くことを得べきに」と。ついに彼女は東禅寺のうらで小児を石で打ちつけて、墓のそばの石桶の中にさかさまに沈め殺した。一方、一夜明けると正気に戻って深く罪を感じ「共に死なむ」とすることによって「親の情」を見せる。が、ついに彼女は「狂女」になり、あっちこちを徘徊する。

以上の筋から考えるに、この作の主題は「兇殺」である。その原因は経済的な貧しさのためであるが、それに氣鬱病が我が母の内面世界に大きく働きかけたと言えよう。もし我が母が氣鬱病に罹っていなかったならば「偶然の狂乱」という凄まじい事件にまで至らなかつたかも知れない。そこに透谷が何故わざと「狂女」を登場させているかという謎めいた問題が解かれよう。親として子を殺し、子として親を殺すという行為は大逆不道のものである。これは並みの人間にはとうてい想像も出来ないことであろう。「兇殺」とは正に「人間の運命」のはかなさを表わすものである。だから、「兇殺」は人間の罪、個人の罪ではない。これは人間を取り巻く運命、いわば「社会の罪」である、と透谷は言い做す。つまり、「鬼心」とは「迅速大」なる「まがつびの魔力」に取りつかれて起こさせられる「偶然の狂乱」を言う。この作の題目として「鬼心」を決めた背景には「社会の罪」を痛切に批判しようとする透谷の意図が潜んでいると思う。

生活の窮迫のために我が子を殺す行為、いわば「兇殺」は昔から伝承されている。『今昔物語』巻第九、震旦郭巨の話、そして民俗学者柳田国男氏の「山の人生」<sup>4</sup>等に子殺しの場面が出る。世間のひどく不景氣

の年に、やむを得ず我が子を殺さなければならぬ親の悲しい気持ちがある。そこに描かれている。東西古今を問はず、子供はその生存権を親によって支配されてきた。貧しさの中で多くの子供達は殺され、餓死させられ、遺棄された。子殺しは特に、江戸後期の凶作、長期間の餓饉を契機に一挙に広がった。その代表的なものの間引である。これは生れたばかりの赤子、嬰兒を殺す行為を言う。江戸時代には農作が実らず多くの人々が飢え苦しんだ餓饉が幾度かあった。その中で最も長く七年間も餓饉の続いた、いわば天保七年餓饉が最も酷かった。これは天保四年(1833)から同七年にかけての全国的餓饉をいう。東北地方だけでも十万人を超える人達が飢えのためにあるいは疫病にかかって死んだ。そして、全国の死者は疫病死をふくめ二十万から三十万に及ぶと推定される。このような全国的凶作は子殺しの主な原因になった。子供の運命とはあまりにも悲しいものである。

江戸時代後期には間引はほとんど全国的に行なわれていた。この風習は明治以後に至っても容易に根絶されなかつた。一方、「七歳までは神の子」と言い、七歳以下の嬰兒が我が親に殺される場合が多い。これも間引と同じく昔から伝承されていたが、明治以

後に至って、親子心中の形で行なわれ始めた。柳田国男氏に言わせると、生活の苦闘に堪えかねた世の若い母親たちが、まだ東西も知らぬ幼児を道連れにするのでなければ死なぬというのは、明治以後の一つの流行であった。その背景には子殺しを殺人罪として意識していないという日本文化の独自性がある。生れたばかりの赤子はもちろんのこと、一般に六歳くらいから下の子供はほとんど一人前の人間として取り扱われなかった。それ故に、間引であれ、道連れのための子殺しであれ、いづれにせよ殺人として意識されていない。それは刑法の対象になるより、もっぱら教化の対象になる。それが社会通念として通用していたらしい。七歳以上の子供も子殺しの対象になるが、十五歳になれば、名実ともに一人前と認められてその危険から免れるようになった。六歳と十五歳の二人子の中で、六歳の方を殺して、自分もすぐ一緒に死のうとする「狂女」。この「鬼心非鬼心」の筋は以上のような子殺し伝承に相応しい。

江戸後期に至って、官庁の厳しい取り締まりにもかかわらず、子殺しはなかなか断絶されない。子殺しを社会的にも許容する文化が生じたらしい。その背景には日本伝統の死生観が潜んでいる。日本伝統の死生観

は、人間の生をあたかも四季のめぐりのように輪廻するものであるととらえている。これは「徒然草」百五十五段によくあらわれている。春が暮れて後夏になり、夏が終って秋が来るといふものではない。春はそのままた夏の気配をはらみ、夏のうちから既に秋の趣は流通し、秋はそのままでもう寒くなる。そして、木の葉が落ちるのも先に落ちてから芽ぐむというものではない。下より芽ぐみきざす生命の力に堪え切れなくて、古い葉が落ちる、と。生は死によって生みだされ、死は生によって肯定され、生と死が互いに補完し合い、連続する世界。そこに永遠に輝き続ける真の生命が存在する。だから、人間の生とは一回的なものではなく絶えずに繰り返すものである。このような輪廻、転生の思想が子殺し思想の根底に流れ込んでいる。

七歳までの子は、神と人間の中間的存在として見なされた。だから、嬰兒はまだこの世の人として迎え入れられたものではなく、何らかの理由でこのままこの世に迎え入れ難ければ、あの世へもう一度戻すものと考えられた。間引きを多くの地方で「戻す」「帰す」と表現するのはこのような意識の反映とみることができる。このような日本の子殺し伝承思想が透谷の言う「児殺」に流れ込んでいる。それで、「児殺」す

「親の情」には子供の世界である「無邪気の世界」、「想世界」を保持しようとする透谷の意図が潜んでいると思う。なお、透谷は日本の子殺し伝承の底に流れている「まがつびの魔力」を詩想中に産み出すことが出来たと言えよう。

「鬼心非鬼心」における「鬼心」の問題はその後の書評「罪と罰」(明治二十五年十二月十七日)と『罪と罰』の殺人罪(明治二十六年一月十四日)にまで貫く。これはロシアの作家ドストエフスキの小説『罪と罰』の書評である。透谷は書評「罪と罰」の中に「第八回以後はその罪によりていかなる『罰』、精神的の罰、心中の鬼を穿ち出で、益精に、益妙なり」と評する。小説『罪と罰』を「心中の鬼を穿ち出」た「心理的小説」とみている。この「心中の鬼」とは他ならぬ「鬼心」を言う。だから、書評「罪と罰」は前作「鬼心非鬼心」に続くもう一つの「心理的小説」である。ここに二作の繋りがある。二作は共に殺人を素材にしてその原因を餓えに求めている。我が子を殺す母がそれであり、ラスコーリニコフが高利貸老婆を虐殺するに至るまでの道程がそれである。

ラスコーリニコフはもう二週間にもなるのに部屋に閉じ込められて外に出掛けない。彼は食うものもなし

で坐っている。女中に聞かれても「考へる事」(256)と答えるだけである。彼は現実世界に程遠く切り離されている。その瞬間彼は自分の心身がひどく弱っていることに気付く。実際彼は、もう二日間、ほとんど何も食っていない。もっともこういうことは、あまりものに凝りすぎた「ある種の偏執狂」によくある。もう「真実に頼る處がな」(258)い、というこの一句が窮迫がどんなにひどいものであるかを訴えている。質屋から帰り道に飲み屋に寄る。自分がこう急に弱ってしまったのも、一つは空腹のせいであると思う。それで、せめて冷たいビールと乾パンひときれでもたべようかと思う。食るように最初の一杯を飲み干すと、たちまち気分がすっと軽くなって、思考力がはつきりする。この飢えることが彼の「ある種の偏執狂」を一層増幅させて、ついに殺人罪を起こさせる原因を与えるようになる。

小説『罪と罰』は「彼の奇怪なる一大巨人(露西亞)の暗黒なる社会の側面を暴露して余すところなし」とされている。「鬼心非鬼心」の作品の規模は「実聞」としての小品に過ぎない。が、「(露西亞)の暗黒なる社会」の舞台を日本に移し変えたのが「鬼心非鬼心」である。餓鬼道と言うべき「最暗黒の社会」はいかに



も凄まじい世界である。そこに潜んでいる「おそろしき魔力」は分別盛りの知性人の目を眩ませて学問なく分別ない者でさえ躊躇すべき悪事を企ませる。これを見事に現しているのが「この書の主眼」であると透谷は締め括る。書評『罪と罰』の内容は「鬼心非鬼心」のそれに似通っている。まず、二作の殺人役、実の母とラスコーリニコフは共に気鬱病者であり、なおかつ「狂人」である。それに二人を取り巻く社会の状況、それも同じく餓鬼道と言うべき「最暗黒の社会」である。また二人はそれぞれ「おそろしき魔力」「まがつびの魔力」に取りつかれて殺人罪を犯す。そして二人の殺人は「個人の罪」でなく、「社会の罪」として認識されている。いわば、二作における登場人物の個性、社会の状況という空間的舞台の設定、そしてその中行なわれる主人公の犯行動機、あるいはその認識等がほぼ同じ構想の下に成されている。「心池蓮」(明治二十六年三月)によると、両作は「罪の葉」よりもむしろ「罪の根」を刻もうとすることによって「人の性情」を問うものである。

『罪と罰』は内田魯庵の翻訳で第一巻が明治二十五年十一月十日に、第二巻が明治二十六年二月二十五日に刊行された。このことから考えるに、透谷と小説

『罪と罰』との初出会いは「鬼心非鬼心」を執筆してからおおよそ五日たらず後から一か月十日後までの間の出来事になる。この時期の透谷の意識は、当然「鬼心非鬼心」のイメージから強く働きかけられている。透谷が小説『罪と罰』にあれほど心酔し、なお素早く書評を執筆したその背景はなんであろうか。たぶん、透谷は小説『罪と罰』を読んで所謂シンクロニズム(synchronism: 共時性)を感じさせられたからであろう。なお、これが透谷をして小説『罪と罰』を理解しやすくしたはずである。つまり、透谷は「鬼心非鬼心」における「まがつびの魔力」に続き、小説『罪と罰』における「おそろしき魔力」にもう一つの「他界に対する観念」を見付け出したわけである。結局、英子誕生が「鬼心非鬼心」の執筆動機になり、その「親の情」に関わり合っている「鬼心」が書評『罪と罰』の殺人罪の「鬼心」を生み出した一つの背景になったと言えよう。

#### 四、「ツルゲネーフの小品」

世の中で親の愛、親の情よりも偉大なものがあろうか。我を生んで育ててくれた親。親と子との血縁関係は特別なものであろう。両者は強い絆で結ばれている。

親の愛とはまさしく自然の摂理である。透谷には「ツルゲネーフの小品」という文がある。ロシアの作家ツルゲネーフの作を透谷が日本語訳で紹介している。これは明治二十五年十二月二十六日「平和」第九号に発表された。その半年前の六月一日長女英子が生まれている。勿論、「ツルゲネーフの小品」には一人子英子への透谷の「親の愛」が重なり合っていないか。なぜならば、それは次のような内容をもっているからである。

遊獵よりの帰りに余は邸内の庭の並木道を緩やかに歩く。この時、獵犬が何事かあるように静かに前進する。恰も獲物を見出したかと思われる様子を示す。黄色い雛雀一羽が巢より地上に落ち、飛び上りもせず、呷き声もなく、まだ生え揃わぬ翼をばたばたするばかりのところ。獵犬は打ち騒がず近寄る。親雀は逃げ惑う雛のSOSを受けたか、すぐさま稍より飛び下り、体当たりの特攻を挑んでくる。二度、三度と体当たりを試みる親雀の悲愴なまでの捨て身の愛には、犬もたじたじとなる。獵犬の上に舞い、その広く開けた巨口を物ともせず、飛び入らんばかりである。親雀は雛雀を助けようとする。この時の彼の眼中には何物をも怖れともせず、ささやかな体は戦慄する。悲鳴一声は哀

れに荒々しく限らない奥惱、戦慄、この一瞬は獵犬の一瞬に終ってしまう。親雀は雛雀に救いの手を差し延べ、この危機に立ち向う。親雀のどこにそんな力があつたか。犬は静かに見、やがて立ち去る。「死」や「死の怖れ」よりも強い「親の愛」が獸の獵犬にも「自然の慈悲」を感じさせたのか。雀物語は「何物かこの愛に助けられ、愛に動かされざるものあらむ」という文をもって締め括られる。

以上が「ツルゲネーフの小品」の粗筋である。この雀物語に流れる「親の愛」とはあまりにも抒情的なものである。二十四歳の若者透谷にも「親の愛」が感じられ始めた折であろう。雛雀には英子の無邪気なイメーヅが重なり合っている。「厭世詩家と女性」に言わせると、この巢こそ「想世界」である。自分の翼で飛ぶことのできない雛にとって、最も安心できる場所、それが巢である。そこに住んでいる雛雀は「想世界」の持ち主である。そして、「実世界」(獵犬)の攻撃に堪えない雛雀に救い手を差し伸べるものが親雀であり、そこに「親の愛」が潜んでいる。この文は「実世界」に垢付かぬ嬰兒、英子の存在が「想世界」指向の透谷にいかにも大きな存在であるか、なおそれを見守る「親の愛」の役割を示すものである。透谷は

「親の愛」を親子雀に譬えている。子を思う「親の愛」とは人間であれ、動物であれ変わらないものである。

「ツルゲネーフの小品」は元来ツルゲネーフの『散文詩』に「すずめ」という題名をもって収録されている一文である。『散文詩』は明治十年(1877)から死の前年明治十五年にかけて、最後の五年間における個人的社会的からのさまざまの印象、観察、物思いを書き記したものである。『散文詩』ははじめ作者によって「セニリア」(SENILIA : 老いたる言葉)と名付けられていた。明治十五年夏、ツルゲネーフの死ぬ一年程前に、雑誌「ヨーロッパ報知」の主筆スタシュレーヴィチに送って同年の末にその新聞に載せた。『散文詩』という総題は作家が編集者宛の書簡のなかに用いている「散文詩」の言葉を選び取ったわけである。ツルゲネーフははじめ発表の意志をもたなかったが、編集者の熱心な勧めを聞き入れて、ついに発表を承諾した。これは彼の晩年時代の作であり、老作家の心の陰りが感じられる。

「すずめ」は明治五年四月の作である。これがどんな経緯を経て透谷にまで伝えられてきたか、その真相はいまだに明らかにされていない。透谷が「ツルゲネーフの小品」を紹介した時期は、丁度彼のロシア文学へ

の関心が高まる時期である。この作は小説『罪と罰』の二書評、「罪と罰」と『罪と罰』の殺人罪」の発表時期の間に挟み込まれている。その冒頭は「ツルゲネーフは露国の大家なり。その曾つて記せし一文、自然の慈悲を描して妙趣あれば、左に譯載しつ。」に始まる。この一文から考えるに、透谷が「自然の慈悲」にひどく心を打たれたことがわかる。透谷以来、島村抱月、池田健太郎<sup>3)</sup>によって「すずめ」は日本語訳で刊行された。島村抱月は明治四十三年十一月、そして池田健太郎は昭和三十三年八月にそれぞれを発行した。前者は仏訳を、後者は露語より英訳されたものを参照した。これらの三人の翻訳の内容は大体同質のように見られるが、何か所にわたって言葉の使い方のずれが見られる。そこに透谷の狙いが潜んでいると思う。

「すずめ」はほぼ三つに集約できよう。もちろん読み方によっては三つ以上ともすることが出来る。その三つとは犬の存在と親雀の力、そして親雀の愛の性格がそれである。まず、島村抱月と池田健太郎は犬の存在をそれぞれ「巨大な怪物」、「大きな怪物」という。また、親雀の力とその愛の性格を共に「この力」、「愛」と語る。一方、透谷の方は「一大鬼物」、「怪しき力」、「親の愛」と描写している。この翻訳の仕方を見るだ

けでも透谷の狙いがどこにあるかがうかがわれよう。一つ、地面に落ちて生え揃わぬ翼をばたばたするばかりの雛雀を獲物にしようとする犬を「鬼」に喩える。二つ、親雀は子雀に救いの手を差し延べようとして体当たりを試みる。その親雀を支えるのは「怪しき力」である。三つ、この悲愴窮まる捨て身の愛を「親の愛」と言う。いわば、「鬼」「怪しき力」「親の愛」、これらの三点が「ツルゲネーフの小品」の主題と密接に関連付けられている。しかも、それぞれの把握の仕方によって、作品の評価を異にするわけである。

以上の三点は前作「鬼心非鬼心」の主題とほぼ一致する。そこで、二作を見比べることによって、「ツルゲネーフの小品」を執筆した透谷の狙いが何であろうかに注目したいと思う。一つ、雛雀を獲物にしようとする犬が「鬼」である。一方、我が子を殺す「狂女」の心境も「鬼心」である。二つ、我が子を救うために「死」や「死の怖れ」をも考えずに捨て身をする親雀の様子。これは「狂女」の行為と正反対の方向であるが、「偶然的狂乱」に相応しい。三つ、親雀の「怪しき力」は「まがつびの魔力」に当る。両方はそれぞれ「迅且大」、「深、且大」と描かれている。なお、我が子を殺した「狂女の力常の女の腕にあらず」とある。

親雀は雛を救うために安全な梢を捨てて、この危機に乗りこえる。親雀をかくまでさせたのは「怪しき力」が作用したからである。犬はこの「怪しき力」を感じて、やがて立ち去る。「余」も犬を呼び返す。秘に「余」の胸中に「何物かを崇畏するの念を起す」。

しかし、二作における「鬼」、「狂」、「怪しき力」と「まがつびの魔力」は共に「親の愛」に関わり合っているが、それぞれの方向は正反対である。要するに、一方は我が子を殺すためのそれであり、他方は我が子を救うためのそれである。正しく、「鬼心」が「狂」であるか、それとも「非鬼心」が「狂ならず」か。それが別ち難い。「親の愛」である。「心機妙変を論ず」（明治二十五年九月）には「人間の心池」には「善鬼悪鬼美鬼醜鬼」が混交し、乱戦する。これは小休みなく生命の尽きるまで戦い続けて、人間を病ませて疲らせて悩ませる。人間が他の動物と異なるところがここにある。「至善」は「悪」の外被に蔽われている。一方、「至悪」は「善」の皮肉に包まれている。これは「古来哲士の為難しとするところ、凡俗の容易に企てる能ざる難事なり」とある。この「心池」の問題は「心池蓮」（明治二十六年三月）に続く。ここに複雑でとらえ難い「人間の本性」が語られている。「心池」

での「争」いとは「善と悪」、「明と暗」、「神」と「悪魔」にのみ限られたものではない。「この『紛闘』は、吾人を提げて天にまで達せしむる外面鬼にして、而して内面神女なるものなり」とある。この「心池」の問題は「鬼心非鬼心」と「ツルゲネーフの小品」における「鬼心」、「親の愛」のことを示唆する。

つまり、透谷は「鬼心非鬼心」に続いて、「すずめ」の世界にも「鬼心」を見付け出したわけである。これが透谷をして「ツルゲネーフの小品」を書かせるきっかけを与える。「ツルゲネーフの小品」には「他界に対する観念」の形成を充足される条件、いわば「邪悪なる魔力」（サタニツク・パワー）と「天力」（ヘブンリー・パワー）という両極的構造が共にととのえられている。親雀の「怪しき力」と犬という「一大鬼物」がそれぞれである。この背景には一人子英子誕生の時期頃出来上がった「親の愛」が強く働きかけられていた。

##### 五、おわりに

「親の愛」。いわば、親が親の子供を思う母性愛が日本では昔からのぐらいい歌い続けられてきたのであるうか。「万葉集」以降の和歌の中に現われた男女の相聞歌・恋愛歌に比べれば子供を思う親の歌の数は割

合に少ない。子供が病死した場合、あるいは子供との別れる場合等にのみ悲しみ気持を歌にしている。例えば、「万葉集」において人間愛を主テーマにする歌人山上憶良の歌、一熊凝の歌（五—888）、古日の歌（804）、「子等を思ふ」歌（802）一、『大和物語』（四五—五）での藤原兼輔（堤の中納言）の歌。謡曲「隅田川」「三井寺」「百万」は我が子を探す「狂女」物語である。日本には母性愛という語は明治以前にはなく、それまでは母の愛という意識さえもない自然さに於て子どもを思ってきたのが日本の母である<sup>12</sup>と向山淳子氏は指摘される。そのような文化の背景は何であろうか。親として子を哀れむ、子として親を思うことは天の道であり、自然の摂理である。親と子との血縁関係があまりにも自然すぎるものである。この「自然さ」が逆に不立文字を生み出したのであろうか。いずれにしろ日本では親の子供を思う歌がまれにしか見られないという事実注目したいと思う。

透谷における「親の愛」はどのように築き上げられて、どんな役割を果たしているか。船橋聖一氏の『北村透谷』<sup>13</sup>（昭和十七年一月、中央公論社）がある。これは透谷の伝記を小説化したものでフィクションである。が、透谷の詩、小説、評論、書簡、日記等を素材

として充実に用いることにより透谷研究の重要な文献

になっている。そこに英子誕生をめぐっての記事がある。明治二十五年六月一日、英子が生れた。その直後透谷は桜井明石のところへ行き話を交わし合う。一子を成した感想を問われ、「これから、子供を研究するんだ」と透谷は答える。桜井も透谷の意中を見抜く。

「この間、皆が云ふとつたぞ。透谷も子供が出来たら、論文の調子が一変するんじゃないかって。子供は人生の秘鑰なりになるんじゃないか」(p233)と桜井は言う。「厭世詩家と女性」における「人生の秘鑰なり」の主役である恋愛がここに至って子供に置き換えられている。この子供を素材にしたものが他ならぬ「鬼心非鬼心」である。しかし、この作に描かれている子供は我が親にかわいがられるものではなく、我が親に殺されるという悲しき運命の持ち主である。窮迫のために我が子を殺さなければならなかった「狂女」に、透谷は同病相憐れみを感じたのであろう。結局、英子誕生は「貧詩人の悲しさ」を一層増幅させたのである。そこに透谷における英子誕生の意味がある。「一日二銭の出費を慮つて」我が子を殺した「狂女」の行為は「人のことだとばかりは云へない」(p233)とある。この呟きのような主人公透谷の話に親としての透谷の

苦悩が重なり合っている。

透谷は「鬼心非鬼心」を発表した二か月足らずの後、「ツルゲネーフの小品」を紹介する。二作は共に親子の關係をもつて設定されていることで一致する。しかし、前者は我が子を殺す「狂女」の「親の愛」が、後者は我が子に救いの手を差し伸べる「親の愛」がそれぞれ描かれている。これらの二作に表われた母性は、われわれの人間が多かれ少なかれ抱いているものであるが、それが両極端に出た例といえよう。人間であるから、当然、この二つの要素が拮抗し、様々な形で入り組んで生きている。従って、どちらが良いか悪いか、正か邪か、白か黒かという判断や評価は差し控えるべきであろう。しかし、なおかつ大切な問題はそこに透谷のどのような世界観が築き上げられているかということである。言い換えれば、透谷が二作を執筆した意図はどこにあるかという問題に繋がる。

「他界に対する観念」には透谷特有の文学観が展開されている。「詩歌の世界」は「想像の世界」である。霊がないものに霊があるように、人でないものを人のように、実でないものを実のように、見られないものを見られるようにするのは「此世界の常」である。詩歌の国には必ず「鬼」と「神」がある。これは「二岐

に分れたる同根の観念」である。いわば、二元性の構造を成している。「詩歌の世界」では「鬼神」を「迷信」することではなく、「想像」することである。「邪悪なる魔力」(サタニック・パワー)と「聖善なる天力」(ヘブンリー・パワー)は共に「人間の観念の区域を拡開」する。東洋の思想・文学は「他界の観念」に乏しい。禅学と儒学は「他界に対する観念」の大敵である。禅は心を法として想像を閉じる。儒学は實際的思想を尊んで「他界の美醜」を想像しない。一方、「基督の神性」は「東洋の唯心的思想」の達し得ぬところに「観念」を及ぼすと同時に、「サタンの魔性」は「東洋の悪鬼思想」の至らぬところまで「観念」を到達させる、と。透谷はハムレットの幽霊をその一例として挙げている。

このような透谷の「他界の鬼神」論はあまりにも西洋かぶれ、キリスト教かぶれのように受け取られる向きもある。しかし、透谷は「鬼心非鬼心」、書評「罪と罰殺人罪」、「ツルゲネーフの小品」、これらの三作に「他界に対する観念」を見付け出した。言い換えれば、母を「狂」わせて実の子を殺させてしまう「まがつびの魔力」、「おそろしき魔力」によって何の罪なき老婆を殺す大学生の犯罪。そして、「想世界」

の持ち主とも言うべき雛雀を攻める「一大鬼物」なる犬。これらの「まがつびの魔力」、「おそろしき魔力」、「一大鬼物」は共に「邪悪なる魔力」の流れを汲んでいる。これが透谷がツルゲネーフの『散文詩』に収録されている五十編余りの作の中で、唯「すずめ」だけを日本語訳で紹介した背景になる。なお、透谷は「鬼心非鬼心」、「ツルゲネーフの小品」における「親の愛」の底に流れている「鬼」をもって、「遠大高遠なる鬼神」を詩想中に産み出すことが出来たと言えよう。これは「文学は人間と無限とを研究する一種の事業なり」という「明治文学管見」(明治二十六年四月)の一句に矛盾しない。透谷は文学の目的が何かをよく語っている。

\*北村透谷の著作本文の引用は勝本清一郎『透谷全集』(岩波書店)に拠る。ただし、旧漢字は新漢字に直し、ルビは省略した。

1、聖書の原文引用は日本聖書協会発行(一九八七年版)に拠る。

2、エマソンの「愛」の訳文引用は入江勇起男氏の訳著『エマソン選集・2』(日本教文社)に拠る。

3、吉田精一、『近代文芸評論史・明治編』、「浪漫主義の文学論」、「北村透谷」

- 4、『定本 柳田国男集』、第四卷、「山の人生」、筑摩書房、昭和三十七年、p59
- 5、『日本民俗学大系2』、「誕生と育児」、平凡社、p271
- 6、竜内大三、「京都府立大学学術報告第24号」、「親子心中と日本人の子供観」
- 7、『民俗学辞典』、「間引」、柳田国男監修、東京堂版
- 8、以下、『罪と罰』のテキストは『内田魯庵全集12』（翻訳）ゆまに書房版による
- 9、島村抱月、『散文詩』、「すずめ」、春陽堂、明治四十三年十一月
- 10、池田健太郎、『散文詩』、「すずめ」、岩波文庫、昭和三十三年八月
- 11、向山淳子、『文学における子ども』、「子ども―大人の父」、梅光女学院大学「公開講座論集（第二十集）」、佐藤泰正編、笠間書院、昭和六十一年十二月十日
- 12、船橋聖一、『北村透谷』、中央公論社、昭和十七年一月